

---

# デコトラ王妃と風の王

小田マキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デコトラ王妃と風の王

### 【Nコード】

N2554Z

### 【作者名】

小田マキ

### 【あらすじ】

「戦争が終わったら、君を必ず迎えに行く」

男は約束を守った……二十年後に。

「今さら来やがっても遅えんだよ！」

夢も希望も怒りも涙も枯れ果てた少女は、ど派手なデコトラを乗り回すたくましき未婚の母になっていた。

## エルフ耳の来訪者

「ふざけんなつ、てめえら十二寝言ほざいてやがる！」

短大最後の春休み、久々に寮から実家に戻ってきた三島<sup>みしま</sup>凧の耳を突いたのは、庭先からした威勢のいい啖呵だった。

一般家庭には少々幅広なアコーディオン式門扉は半ばまで開いたままで、庭先には母の仕事道具である煌々しいデコトラが斜め付けされている。本来、ごつく見えるはずの四トントラックはパステル調ピンクのリボンだとかハートだとかでデコレーションされていて、とてつもなく乙女チックだった。

しかも、ウイングボディの荷台側面には若い頃の母のバストアップ写真がペイントされている……ペガサスなんちゃら盛りとかいうソフトクリームのようにうずたかく巻かれた赤い髪、くるりんと立ち上がった長い睫毛に囲まれた黒目がちな瞳、ちょこんとした小さな鼻に、プルンプルんなピンクシャイニーのアヒル口はまさに小悪魔アゲハ、背中から羽根まで生やして夜の香りがプンプンした地元のキャバクラでナンバーワンを張っていた当時の宣材写真をもとに、馴染みの客だった板金塗装工場の社長が転職祝いとして描いてくれたらしい。

そのせいで、幼い頃は近所の人達から後ろ指を指され、学校で苛めも受けたのだが、母はこれに乗って凧を短大まで行かせてくれた。超個人的なデコトラは自分に対する母の愛情の証し、今となってはありがたいと思っている。

「今さら来やがっても遅えんだよ！」

「本当に申し訳なかった、カエデ……まさかこんなことになるとは」

「カエデ様っ、ロミュアルド様は本当に何も知らなかったのです！」

「いいからとつとと帰りやがれっ、二人とも！」

かつての栄光を刻んだデコトラの向こうで、母・楓は二人組らしい男と口論になっているようだ。

借金の取り立て屋？

尋常ではない母の声にそんな考えが浮かび、凧は肩からかけていたポストンバックを放り出してトラックの向こう側に走り込んだ。

「ママっ……？」

こちらに背を向けて立つ楓は深夜運転の仕事から戻ったばかりのようで、少しくたびれたピンク豹柄のジャージ姿だ。小柄な彼女が手に持ったジップロックコンテナーから塩を引っ掴んで投げつけているのは……何とも怪しげな男二人組だった。

男達の人相風体を目の当たりにして思い出したのは、半年くらい前に一気観した某ファンタジー映画三部作のとある登場人物……凧自身は特に映画好きでもファンタジー好きでもなかったが、夏休みに短大の友達宅にみんなで泊りに行った際、朝方までガールズトークをしていたときのBGMとしてかかっていたのだ。少しだけ口にした誰かが買ってきた微アルコール飲料に、十九の年まで免疫のな

かった風は上機嫌に笑って、喋って、泣いて、気が付けば気絶する  
ように眠ってしまい、起きたときには正直ストーリーの半分も覚え  
ていなかった。ただ、ガールズトークの合間に、友人の一人が丁度  
画面に映ったエルフとかいう種族を演じる俳優を指差して、自分に  
似ていると言ったことだけはおぼろげに覚えていた。

母親が対峙する二人の男達の容姿は、映画の中に出てきたエルフ  
に酷似していたのだ。肌は色素の薄い緑色、耳も先端がピンと尖っ  
ている……映画と若干違って、コンタクトレンズか何かだとは思  
うが、瞳の白目と黒目部分の色が反対になっていた。

一人は百七十五センチある自分よりも背が高く、銀髪に反転した  
緑色の目をした恐ろしく美形、年は三十前後くらいだろうか……ロ  
ーマ法王など聖職者が身につけるような、細かい刺繍を施された緑  
色のローブを身につけている。

もう一方は、自分よりも若干背が低く、黒い髪に同じく反転した  
黒い目をしていて、隣の華やかな美形に比較して多少地味ながら整  
った顔をしている。黒と灰色を基調とした立襟のロングコートのよ  
うな出で立ちで、腰にはばっちり剣を携えていた。

一目見るなり絶句……どう考えても、借金取りではない。

さきほど彼らは母を「カエデ」と名前で呼んでいたから、知り合  
いなのか一方的に知っているのか……以前、日本全国を走る強烈な  
デコトラがいる、ということテレビ局が母を取材しに来たことが  
あった。その際、かつて地元界隈では伝説のキャバ嬢と呼ばれてい  
たことも大々的に取り上げられ、実年齢よりも随分若く見える母に  
その話題性から風俗業復帰の打診が山ほどやって来た。中には、店  
を一軒プレゼントするからと土下座して頼んできたかつての常連客

もいた。

そんな楓の噂を耳にしてやって来たコスプレ・バーだかパブだかのスカウトマンだろうか？

ハリウッド映画の特殊メイク並みの扮装をした彼らを前に、凧はぼんやりと考えていた。

「凧っ？ あっ……今こつち来ちゃダメっ、逃げな！」

「えっ？ ……ぶわっ、痛い！」

呆然と立ち竦む彼女を振り返った母は、そう言って自分に塩を投げつけてくる。危機感をあおろうとしたのか、正気を取り戻させようとしたのか……顔面に力いっぱいぶつけられた塩が大量に目に入り、凧はあまりの痛さにその場に蹲ってしまった。

「姫っ……大丈夫ですか？」

常より二割り増し塩辛い涙を流して悶絶する自分の両肩をがっしりと掴み、覗き込んできたのは、背の低い方のコスプレ男（自分比）……歪んだ視界に黒い影が滲む。

姫って一体、なにっ？

明らかに自分に向けたぶっ飛んだ呼号に、凧はゾワゾワした寒気を覚えた。どうやら格好同様に、彼らは脳みそまでおかしな世界の住人と化しているようだ。

「アタシの娘に触んじやないよ！ ……こらっ、放せや変態！」

「落ち着いて、カエデ……本当に、口が悪いのは変わってないねえ。まあ、つもる話はシルフェストレに戻ってからにしようか」

「だっかつらっ、アタシも凧もンなトコ行かねえつつってっだろーが！」

その肩越しに、大きい方のコスプレ男（自分比）と揉み合っている凧の姿が薄ぼんやりと映り込む。

「ちよつとっ、ママに何するの！」

変質者（多分）に羽交い絞めにされる母親の姿を目の当たりにした凧は、慌てて目の前の男を押しつけようとすることが……

「落ち着いてください、姫。ロミユアルド様も私も、危害を加えるつもりはありません」

肩をがっちりホールドされていて、身動きがまったくとれない。細身に見えたが着痩せする性質のようで、両手で押しやるうとした胸板は硬い筋肉で覆われている……身長は変わらないのに、いくら押してもビクともしなかった。

「何なのよっ……貴方達」

背の高い中性的な容姿をしていても、腕力は一般女子に劣るくらい、運動神経からつきし、鈍足で身体も硬い……大好きな母親を助けることもできない見かけ倒しな我が身が情けなくて悔しくて、塩はあらかた洗い流されたのに、涙は引っ込むことなく目の奥から染み出してくる。

「……っ、……泣かないでください、姫」

そんな痛々しい凧の姿に、さすがに気の毒になってきたのか……コスプレ男の腕の力は若干弱まり（それでも婦女子が抜け出せるほどではない）、声のトーンも幾分柔らかく落ちてくる。

「私達はただ……カエデ様とナギ様をシルフェストレの王妃と王女として、お迎えにあがっただけなのです」

はっ……？

またしても奇々怪々な話を口にした目の前のコスプレ男に、凧の背中を猛烈な勢いで悪寒が駆け抜けるが……

「感動の再会が、こんな妙なたちになってしまっただけじゃないねえ……初めまして、ナギ。私は真正正銘、君の本当の父親だよ」

次いで、母親を背中から拘束したコスプレ男が笑顔で発した言葉に、目の前が真っ暗になった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2554z/>

---

デコトラ王妃と風の王

2011年12月9日00時52分発行